

修士論文（要旨）
2016年1月

日本語教師の悩みとその変容
—他機関に所属する教師同士の対話の効果—

指導 齋藤伸子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
213J3016
古川由美子

Master's Thesis(Abstract)
January 2016

The Effect of Interschool Discussion Groups on the Worries
of Japanese Language Teachers

Yumiko Furukawa

213J3016

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

第1章	はじめに	
1.1	研究動機と研究背景	1
1.2	研究目的	2
第2章	先行研究	2
第3章	調査概要と分析方法	
3.1	調査概要	4
3.2	アンケート調査	
3.2.1	調査協力者	4
3.2.2	調査方法	5
3.3	教師による対話	
3.3.1	調査協力者	5
3.3.2	調査方法	6
3.4	分析の枠組み	6
3.5	分析方法	7
第4章	アンケート調査の分析と考察	
4.1	アンケートの回答の分類	8
4.2	「A. 自分の授業の進め方ややり方」	12
4.3	「B. 学習者への対応」	13
4.4	「C. その他」	14
4.5	アンケート調査の考察	15
第5章	日本語教師による対話の分析と考察	
5.1	日本語教師による対話と分析方法	17
5.2	日本語教師 MST へのインタビュー分析	
5.2.1	経営者の方針と教務の教育観について	18
5.2.2	「しゃべり部」の意味	21
5.3	日本語教師 FHT へのインタビュー分析	
5.3.1	大学と大学院で学んだ日本語教育と実践のつながり	22
5.3.2	学校の視聴覚教材について	24
5.3.3	「しゃべり部」からの影響	26
5.3.4	「しゃべり部」の意味	27
5.4	日本語教師による対話の考察	30
第6章	総合的考察	31
6.1	日本語学校の活動システム	31
6.2	活動システムに発生する諸問題	
6.3	「しゃべり部」の活動システム	36
第7章	まとめと今後の課題	39

参考文献

資料

要旨

日本語教師には、様々な能力が求められるが、日本語学校においては、授業以外にも在籍管理、進路指導など多くの業務があり（奥田 2006）、夫々の組織の中で他教師との関係にも配慮しながら多忙を極めた毎日を送っている。そのような状況の中で、教師は日々の問題や個人の課題にどのように対処しているのだろうか。

日本語教師の研修や「成長」の考えかたとして、教師個人が「内省」するだけではなく、協働で自己の実践を振り返ることが注目されている。他者に自分自身の教育実践を語ることにより、自身の言語観や言語学習観が明確に意識され、それらを見直すことにつながるからである。日本語教師が語り合う意義も主張されている（末吉 2011、有吉他 2013）。「対等な立場」で話すことによって、自らの「悩み」や実践を語り、自身を振り返ることで、次のよい実践につながる。教師には、話しやすい「場」の存在が必要とされているのではないだろうか。

本研究では、日本語教師の授業、学習者、所属機関等に関する悩みや課題に対処するために、教師同士の対話に効果があると考え、その効果を明らかにしたい。

その調査として、アンケート調査と、少人数での対話、対話の事後インタビューを行った。アンケートでは、日本語教師がどんな悩みを持ち、どのように対処してきたか、あるいはしようとしたかを調査し、SCAT (Steps for coding and Theorization) (大谷 2008、2011) を用いて分析する。分析の枠組みとしてエンゲストロームの「活動システム」のモデルを用いて記述する。

アンケート調査の結果、日本語教師は様々な「悩み」を抱えており、その要因は、学習者のそれまでの学習観、個々の教師のビリーフ、日本語教師養成講座の内容、非常勤講師と専任講師との関係等であることがわかった。また、「学習者への対応」に困った経験のある教師が多く、日本語学習目的が希薄な学習者の対応や、出席率の管理がそのエピソードとして多く挙げられた。

次に行った「日本語教師同士の対話」では、教師の対話の会を「しゃべり部」と名付け、4 回の実践を行った。ここでは、参加者の同等な立場を保証するために、参加者を異なる教育機関に勤務する教師とした。話題は主に参加者の学校で起こったこと、対応に困っている学生のことなどである。4 回の実践終了後、参加者に事後インタビューを行った。事後インタビューでは、他の「しゃべり部」参加者の発言から、自身の考え方に影響を受けた場合も見受けられた。

以上のアンケート調査と教師の対話の事後インタビューから、日本語学校の「活動システム」のどの部分に問題が生じているのか、そしてそれをどう対処していけばよいのかを考察した。そして異なる教育機関に所属する教師の対話が、どのように相互作用するかをモデルで示した。

異なる教育機関に所属するからこそ、「一人の日本語教師」として対話が可能になり、対話の内容から、自身の所属する機関とそれ以外の機関の相違点の発見や、あるいは共感が得られた。また、その相違点や共感が各機関にフィードバックされ、さらに各機関での教育実践に作用するという効果を生む可能性もあるだろう。これらの相互作用を生む可能性を広げるためには、対話の場を強いリーダーシップで作るのではなく、「ゆるくつながる」ことが重要であると考えられる。

参考文献

- 有森丈太郎・青山玲二郎・鬼頭夕佳・佐野香織・瀬尾匡輝・橋本拓郎・山口悠希子・米本和弘 (2013) 「オンラインでのつながりがもたらす教師たちの変容：教師の自分史を通して」『2013年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 175-180.
- 飯野令子 (2009) 「日本語教師の『成長』の捉え方を問う：教師のアイデンティティの変容と実践共同体の発展から」『早稲田日本語教育学』5, 1-14.
- エンゲストローム、Y. (1999) 山住勝広・松下佳代・白合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋昇訳『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』, 新曜社.
- 大河原尚 (2006) 「他者の経験を知ることの意味：多様な確信（ビリーフ）を持つ教師と日本語コースのあり方に関する考察から」、『別科日本語教育：大東文化大学別科論集』8, 1-9.
- 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』, 54(2),27-44
- 大谷尚 (2011) 「SCAT:Steps for coding and Theorization：明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『日本感性工学会論文誌』, 10(3),155-160
- 奥田純子 (2006) 「教師研修と学校運営」春原憲一郎・横溝紳一郎編著『日本語教師の成長と自己研修：新たな教師研修ストラテジーの可能性を目指して』, 200-224, 凡人社.
- 金田智子 (2006) 「教師の成長過程」春原憲一郎・横溝紳一郎編著『日本語教師の成長と自己研修：新たな教師研修ストラテジーの可能性を目指して』, 26-43, 凡人社.
- 末吉朋美 (2011) 「教師による『語りの場』の意義：ある日本語教師とのナラティブ探求を通して」, 『阪大日本語研究』23, 79-109.
- 中澤木聖・竹田寛・立花浩司・藤田剛・畑谷成郎・笠原勉・松田健太郎 (2009) 「サイエンスコミュニケーションネットワーク横串会--組織や地域の垣根を越えたプラットフォームの試み」『科学技術コミュニケーション』5, 105-116.
- 中原淳 (2004) 「教師の学習共同体を作り出す：コンピュータに媒介された協調学習のデザインと介入」, 石黒広昭編著, 『社会文化的アプローチの実際：学習活動の理解と変革のエスノグラフィー』, 北大路書房.
- 藤川美穂・加藤由香里・古屋憲章 (2012) 「省察的実践のための教師学習コミュニティ成立条件」『日本教育工学会研究報告集』2012(5), 37-42.
- 松本浩司 (2013) 「授業のイノベーションにおける発達のワークリサーチの可能性と課題—日本における活動理論研究のさらなる発展のための方法論的試論—」『名古屋学院大学論集』社会科学篇, 49(4), 85-96.
- 山住勝広 (2004) 『活動理論と教育実践の創造—拡張的学習へ—』, 関西大学出版部.
- 山住勝広 (2008) 「ネットワークからノットワーキングへ：活動理論の新しい世代」『ノットワーキング：学び合う人間活動の創造へ』山住勝広・ユーリア エンゲストローム編, 新曜社.
- Engeström, Y. (2001) Expansive Learning at Work: Toward an activity theoretical reconceptualization, *Journal of Education and Work*, 14(1), 133-156